

新年司教書簡

新求道共同体「道」に関して

高松教区に働く司祭、修道者、信徒の皆様へ

新しい年を迎えて、新年のご挨拶を申し上げます。今年こそ教区の「再生と一致」に向けて、司教と共に歩む決意をしてくださるようお願いします。

わたしは昨年（2010年）12月13日、バチカン國務省から、新求道共同体「道」のことについて話し合いをしたいという連絡を受け、三人の司教とともにローマに赴きました。当初は、教皇様、ベルトーネ國務長官、ディアス福音宣教省長官とわたしたち日本の司教がテーブルを囲んで話し合うことを予想しておりました。しかし宿舎に到着すると会見の時間と場所が変更になっており、さらに会見の間につくと教皇様と五人の枢機卿と一名の大司教（國務省次官）、驚いたことに平山司教もあり、同時通訳つきの終始重々しい会議になりました。会談の内容については、ここで詳しく述べることはいたしません。2011年1月2日付けと1月16日付けのカトリック新聞に、日本の四人の司教とバチカン高官が、「道」の問題について会談を持ったことが掲載されていますのでお読みください。また、インターネットで世界キリスト教情報を開きますと、会談の内容がかなり具体的に報道されています。

昨年の暮れより正月にかけて、数人の心ある司祭、信徒の方々からローマ会談の報告を求められました。また、高松教区として新求道共同体「道」について、今後どのように対応していくかについても質されました。「知られず、知らせず」の態度を保持するのはよくないという痛い忠告も頂きました。新求道共同体「道」のことで、日本の司教がローマに呼ばれたことは、国内、国外のインターネットを通して報道され、「道」について多くの記事が発表されています。英国のクリフトン（CLIFTON）大司教区で道の活動が全面的に禁止されたこと、また活動の自粛を促すパレスチナ司教団の声明文も読むことができます。こうした「道」に関するネット上の記事に対して、イタリア語、スペイン語、英語など各国語で多くの書き込みがされています。これから言えることは、「道」の問題は、高松教区または日本の教会だけに起こっている問題ではないのは確かだということです。世界は日本のカトリック教会の動きに注目しています。ことの重大さを考えて、わたしは皆様にきちんと報告し、今後の教区の方針をお伝えするのがよいと判断しました。

その後、12月23日に、教皇大使より話し合いを持ちたいという連絡があり、東京のバチカン大使館に行きました。岡田東京大司教を始め四人の司教も同席しました。席上、バチカン大使から教皇特使が派遣される可能性が高いことが伝えられました。しかし、それまで各司教は「道」の扱いについては自由であって、どのようにするかは各司教に一任されているということで合意しました。

バチカンでの会談の席上で、日本の四人の司教は、教区内の規律に関しては地方教会の責任者である司教に権限があり、普遍教会から承認されているというだけで、地方教会が「道」をどうしても受け入れなければならないという理屈は成立しないことを強調しました。事実、地方の実情を分かっているのは、その地方の司教であって、ローマの判断は地方の司教の意見を先ず聞くことから始めるべきであることも強調しました。これに対するバチカンの高官である枢機卿たちの意見はまちまちで、会談は意見交換というよりも、お互いが自分の意見を述べるにとどまりました。どちらにしても、日本の司教たちがそろって「道」の活動を禁止するということは大きな問題だと、バチカンの高官たちは考えていました。従って何らかの対策を考える必要があるということでもありました。最後に教皇様は、特使を教皇代理として派遣して問題の解決をはかることを前向きに考えると言われました。

バチカンから教皇特使が教区視察に来るでしょう。これを裏返せば、特使が来なければならないほど、高松教区の亀裂は大きいということです。しかも、これで二度目の特使になります。2003年に韓国の金枢機卿が高松教区を教皇特使として訪問し、詳細な報告書を作成しました。そこには当時の教区の現状の分析と対策が記されています。福音宣教省長官ディアス枢機卿は、特使の派遣は教区の信徒の真意を聞くためだと伝えてきました。わたしはこれまで「道」の問題はなるべく静かに、余り公けにせずに解決したいと努めてきました。「道」の人々が、自らが自粛して司教に協力してくれることを待っていたのです。しかし前述のように、事態がこれだけ世界的な問題となった今は、座して待つことはできません。また実際にローマに呼ばれて帰国し、ことの成り行きを教区の皆さんに知らせる必要があると思うようになりました。特使が来ても、情報がなければ全員が口を閉ざすか、知らなかったで頬かぶりをするかで、実態が分からないまま特使が去っていくことが考えられます。

高松教区の司教であるわたしは今、「道」の問題を次のように考えています。この問題は、あくまでも高松教区という地方教会の問題であり、このことに関しては高松教区で解決しないといけません。教皇様もバチカンの高官方も、これは地方教会の問題であり、地方教会の責任者である司教が解決するということでは一致しています。それでも何かの力を借りてでも司教の動きを抑えようとする運動、または組織があるとすれば、これは教区で許されてはなりません。過去20年間に高松教区で起こった出来事、また現に起

こっている出来事を真摯に受け止めることは、教区の全ての方々にとってとても大切なことです。今は自分たちのグループづくりに奔走する時期ではなく、教区にどのように奉仕できるかを考える時期に来ているのです。司教を中心として「教区の再生と一致」への確かな道筋をつける大きな転機に立っています。

結論として、特使が訪れて結論を出すまで「道」の活動を一切中止することを私は命じます。この決定は、司祭評議会、宣教司牧評議会に諮った上でなされたものです。これは対話を閉ざすということではなく、お互いが自らを考えるよい機会とするためです。ことがこじれると振り出しに戻るのが一番良いと言われます。わたしは、「いま」が振り出しにもどる良い時期と判断しました。自分たちの特権を相手に認めさせるべく相手に臨む対話からは「教区の再生と一致」は生まれません。しかし、この決定は「道」の人々を排除していません。本当の対話ができるために自らを振り返る期間を持ちたいとの望みからです。わたしは、「道」の人々を教区の民として尊敬し、彼らが教区の活動に積極的に参加して下さることを希望しています。同時に教区民全員が、この3年間をかけて実現したい教区づくりに積極的に参加して下さいを心から希望します。教区の誰一人も、高松教区をつくるという責任を逃れることはできません。

2011年1月20日

高松教区司教 溝部 脩